行為理論と社会構造の概念

——パースンズとガースミルズについて——

宇賀 博

I

「社会」をとりあげてゆく方法に、一つは、歴史的な社会の全体構造の把握におもきをおくドイツ社会学的なアプローチと、他は、主義的名目論 (voluntaristic nominalism) として特質づけられ、社会的諸集団の心理に焦点をあわせるアメリカ社会学的なアプローチがある。わたくしは、この二つの相対する、つまり、ドイツ社会学にみられるような上からのせまり方とアメリカ社会学にみられるような下からのせまり方とが方法論的なくちいがいをみせるところ、これを中間的な領域と考え、制度的な領域として概念化することによって、この二つの異なるものを統合するその手がかりをもとめたい。そのために、まず、アメリカ社会学のモデルとしてパースンズの理論を選び、かれの理論をどうかえればよい

かを考えながら、他方では、H・G・ガースとC・W・ミルズの共著『性格と社会構造』(Character and Social Structure, The Psychology of Social Institutions, 1953)の基本図式をおくことによって、両者を共通のレベルで比較しながら論をすすめてゆく。かかる議論のすすめ方をするのには次の二つの理由がある。その一つは、目的論、あるいは均衡論をさけるため、パースンズの行為理論を、構造―機能的分析の方法論とはなして理解するそのばあい、かれの理論は、ガースミルズの図式と共通のレベルで比較されうること。たとえば、行為理論を構造―機能的分析の方法論とはなして理解する点については、富永氏の次の言葉を引用できる。すなわち、「構造―機能的」分析が多くのボレミークの前に立たさるべき運命にあったことについてはすでに記した。しかし、この方法論に疑点を

はさむものも、パースンズとその一派の人々による「行為の理論」が約束するかがやかしき豊饒については、これを否認するに躊躇するであろう。「行為の理論」は、まさに「社会科学の基礎理論」としての高い価値を有している。ドイツのダーレンドルフという社会学者は、構造―機能的分析と行為の理論とのあいだには必然的な関係はないのではないかと述べている。パースンズの考え方に忠実に則していく場合には、この提案は否定されるであろう。しかしながら、もしこの提案が、行為の理論のもつ独立した高い意味に評価を与えていわれたものであるなら、たしかにそのとおりである。行為の理論は、構造―機能的分析の方法論をはなれて理解されてよい。」(1)他の一つの理由は、ガースミルズが、「ドイツ社会学とアメリカ社会学ほど相互の欠陥を補うのに適した二つの相異なる研究の方法はない」というマンハイムの言葉を引用し、「歴史的に志向された社会制度の心理学」を確立するにあたって、フロイトとG・H・ミードを統合した図式のうえに、ウェバーやマルクスをとり入れようとする一つの作業モデル (working model) をしめたことにある(2)。

さて、ガースミルズがフロイトとミードの統合図式を描いたが、それと同一レベルで

比較されるパースンズの図式を検討することからはじめたい。前述のガースミルズと同じレベルにあたるのが、パースンズでは、フロイトとG・H・ミードとデュルケムの三者の統合の図式といえよう(3)。そこで、パースンズが社会体系とパースナリティ体系との関係をどのように考えているか、という問題とからまてごく簡単にみておきたい。

パースンズによれば、「社会体系」というのは、社会的・文化的なレベルにおける、二人もしくはそれ以上の「行為者」のあいだでおこなわれる、なんらかの相互作用の過程によって生ずる体系のことである。行為者は、具体的な人間個体(個人)であるか、あるいは複数の個人をその成員とする集合体であるかのいずれかである。個人あるいは集合体は、所与の相互作用の体系に、かならずしもその個人あるいは集合体の、「性質」、動機、ないしは関心の全集合をもって参与するものではなく、この特定の相互作用の体系に適合する一断面のみをもって参与する。われわれは、社会的に、このような一断面を役割と呼ぶ。(4)したがって、このような文脈からは、れい社会体系の役割単位という考え方と、パースナリティ体系の一断面役割という考え方が同時に導きだされてくる。またこれは社会体系とパ

スナリティ体系が相互浸透(interpenetration)の関係で考えられているということでもある。「社会体系とパースナリティ体系とのあいだの境界は、相互依存でなく相互浸透的である。社会体系の単位は役割である。しかし、役割はパースナリティの部分である。」(5)もつとも、このような考え方は、パースンズ独自のものではな。たとえば、その著書『家族』(Family, Interaction and Socialization Process, 1956)にみられるごとく、かれ自身、これをG・H・ミードの社会的相互作用理論、つまり「他者の役割取得」説——IとMeの概念の展開——から受けとっている。もちろん、パースンズはミード理論そのままでなく、その「役割取得」の理論を、さらに「社会的役割」対象の内在化」説として発展させ、フロイトの超自我の概念と、それにデュルケムの後期の立場、いわゆるれいのアフォリズム、「社会は、諸個人のこころのなかにのみ存在する」と結びつけ、文化的型相の「内在化」のメカニズムに関する、『内在化』と『制度化』の二分法的概念を提出して、行為の一般理論の基礎的な概念図式をつくりあげた。パースンズはその論文「超自我と社会体系の理論」(『行為の理論に関する作業論文集』一九五三 第一章)において、超自我の概念が、パースナリティに関する精神分析

学的理論と社会体系に関する社会学的理論とを結びつけるのに有効な概念であることを述べ、同時に、フロイトの超自我の概念と比較される、前述のデュルケムの後期のアフォリズムをそれと共通の理論的な場においたのである。そして、この二つの概念が、ミードの社会的相互作用理論——Me、および「一般化された他者」(the generalized other)——と結合され、社会的「役割」対象の内在化が概念化される(6)。最近の「社会的相互作用を基礎づけているもつとも一般的なパーフォーマンス・サンクションの図式」は、力学的な作用——反作用の図式からの影響もあろうが、おおくはかかる社会的相互作用理論の影響のもとにあると考えてよい。

以上において、パースンズにおけるフロイトとデュルケムとミードの三者の統合をごく簡単に考察したが、次に、ガースミルズのいうフロイトとミードの統合図式とは何か。たとえば、「われわれは、ミードの一般化された他者の概念とフロイトの超自我の概念——両者のもつとも密接な接点——によって、個人的なものと社会的なもの、すなわち、個人の内的行為と広はん社会的・歴史的現象を結びつけることができる。(7)また「じじつ、超自我や一般化された他者に関する研究は、こんにち、われわれの研究のbro-

wing edge にある。というのは、かかる概念によって、われわれは個人の奥深い特性と広い社会学的パースペクティブにおいて存在する諸事実とを結びつけるからである」(8)と。このように述べて、ガースミルズはフロイトとミードを統合した性格構造を描いた。これらによれば、性格構造の中心概念は、有機体 (organism)、精神構造 (psychic structure)、および個人 (person) という三つの概念であり、それらを生物学的と精神分析的、それに社会学的な概念であるとし、たとえば、パースンズがパースナリティ体系の一扇面として役割を考えたように、ガースミルズのばあいには個人という社会学的概念を考えたわけである。社会学的概念としての個人というのは、役割の演技者としての社会的行為者を意味する。個人は組織された社会的役割の内在化からなる。したがって、このことから社会的行為者としての個人という考え方が導かれ、さらに、パースンズが社会体系の単位に役割をおいたように、ガースミルズは制度の単位として役割を考えたのである。「役割の概念、すなわち、われわれの個人の定義における中心的な用語は、同時に、制度についてのわれわれの定義における中心的な用語でもある」(9) それゆえ、パースンズが、フロイトとミードとデュルケムの三者の

統合を描いたのも、また、ガースミルズがミードとフロイトの統合を主張したのも全く同じ角度からといえよう。

(1) 富永健一、訳者解説(Ⅰ)、『経済と社会Ⅰ』岩波書店、一九五八(二八五—二八六頁)。

(2) H. Gerth and C. W. Mills, *Character and Social Structure, The Psychology of Social Institutions*, 1954, Preface, III-V (xviii-xxii)。

(3) 拙稿「行為者—状況」図式に関する研究ノート、ンシオロジ、第六巻、第四号、一九五九。

(4) T. Parsons and N. J. Smelser, *Economy and Society, A Study of The Integration of Economic and Sociological Theory*, 1956. 富永訳(一) 一五頁。

(5) T. Parsons, "Sociocultural and Personality Systems" in Roy R. Grinker (ed.), *Toward a Unified Theory of Human Behavior*, 1956, p. 339.

(6) T. Parsons and R. F. Bales, *Family, Interaction and Socialization Process*, 1956, pp. 55 ff.

(7)(8) H. Gerth and C. W. Mills, *op. cit.*, Preface, IV (xx-xxi)。

(9) *ditto*, pp. 21-22.

II

次に、前述の役割を単位とするレベルから、ガースミルズでの、制度を単位とするレベルへと議論をすすめよう。マートンがいうように、こんにち、社会学においては、地位と役割は社会構造を組立てる主要なブロックである、というR・リントンの命題が広く採用されている。しかし、ガースミルズのばあいにはちがっている。たとえば、「役割がわれわれの制度の概念を組立てる単位であるのと同じように、制度は社会構造の概念を組立てる単位である。」(1) かれらでは、社会構造の単位を制度にもとめ、制度が、前述のごとく、役割＝単位のレベルで考えられているのに対して、社会構造は制度＝単位のレベルで考えられている。リントンが、「…おおくの社会学者は、社会を制度というものから説明し、その諸制度相互の関係をしめすものとして『社会構造』という言葉を用いている。しかし、じつさは、一つの制度はもう一つの文化型相からなる一つの綜合体であり、それは一個の全体としてある一定の機能をもっている。したがって、そのような綜合体相互の関係は、主として文化の組織あるいは統合という領域に属する。また、社会を

制度のうえから研究してゆくことは、ある目的のためには役立つかも知れないが、制度と個人の関係を無視しがちである。」(2) と述べている。が、しかし、かかる難点は、ガースミルズのように、役割＝単位のレベルと制度＝単位のレベルの二段のかまえとすることによって克服のいとぐちがしめされるわけである。リントンが、パースナリティの研究に役立たしめるために、社会構造の方式化を、社会的文化的綜合体の他の側面、すなわち、どのような社会単位が、文化への個人の関与を決定するうえにもっとも重要であるかの観点からすべきであると述べ、もっとも単純な基本的社会——地位と役割の枠組——を構想する。しかし、かかる仕方は、歴史的な、どのような社会をとりあげるかによってちがってくるし、また、パースナリティの研究という点から、文化への個人の関与をきめるのに大切な単位を構想するものであっても、それがかえって、現代社会のばあいでは、全体社会の構造の把握という社会学的なパースペクティブをなくする結果をまねくのではあるまいか。

ガースミルズは、歴史的な現代社会の構造を制度＝単位のレベルで考えたが、もし同じ議論をパースンズにあてはめるばあい、かれの社会体系の概念を、全体社会を把握する

ための単位となる中間的範域のものと考えてよいかどうか、が問題となってくる。そこで、社会体系の単位は役割である(3)、という意味での社会体系とは、社会学的に、どのような範域であるかを次に考える必要がある。まず、(一)パースンズでは、社会体系の戦略的な構造上の意義をもつものとして制度——制度化された、いく組かの役割(role-integrates)の複合——を考えていること。(二)その上位の体系に、理論的に、社会体系の極限のばあ(limiting case)であると考える社会——たとえば、近代国民社会——を思い起していること、などによって、社会体系の概念が、ガースミルズでいう制度の概念と同じレベルのものであることが理解される。また、M・J・レヴィが、社会現象のもっとも一般的な分析のレベルに関して三つのアプローチ、すなわち、(一)“social action” approach (二)“social system” approach および (三)“society” approach を区別し、パースンズとその一派の人々は前二者のレベルでのアプローチである(4)、と述べていることからその範域がうかがえる。

かくて、ガースミルズが、歴史的な時期(epoch)における社会をとらえるために、社会構造を制度レベルで考えたと同じ論理で、パースンズのばあいも、社会体系

の前述の範域から考えて、社会体系を単位とふまえる全体社会を構想することができるのではあるまいか。じつ、パースンズが社会体系の概念と社会の概念とを区別する必要を説き、「社会は、それゆえ、へ一つの社会体系ではなく、相互に組みあわさって相互依存の關係にある下位体系、すなわち、そのおのおのが、まさしく社会体系であるいくつかの下位体系の非常に複雑なネットワークである。」(5)と述べている。しかしながら、かれは社会体系＝単位のレベルを積極的に主張したわけではないし、また、社会は事象的に複雑であって、その科学的な全体認識が困難であるとの立場にたち、社会学を、全体社会に関する理論ではなく、社会体系に関する理論——しかも、とくに《制度化》の理論であるとするなどから、レヴィのいうように「社会的行為」、および「社会体系」のレベルでのアプローチと考えるのが妥当である。しかし他方、新明教授のいうごとく、「パースンズは社会学そのものを狭義的なものと規定しているにかかわらず、これを越えて複雑広大な広義の社会をも組織的に認識しようと試みている。彼はこの企図において綜合社会学の線に進出し、反而において彼の狭義の社会学の主張を裏切っている」(6)と理解することも正しい。社会学理論を全体社会に関する

理論と考える必要がある。この意味で、社会体系を単位——単位レベル(unit level)——とする全体社会——体系レベル(system level)——が積極的に概念化されてよいはずである。全体社会の把握は、社会体系に焦点をあわせるのとはちがって、社会体系をむしろ、方法論上、末分化な単位として設定する必要がある。マクロとミクロの關係において、上位の体系は体系レベルで、下位の体系は単位レベルで記述される(7)。それに、歴史的な原理をもつ社会の構造をとらえようとして、社会体系を単位とする上位の全体社会を体系レベルで構想するばあい、それは同時に、体制レベルへと、その理解をすすめる可能性もできってくる。

それはともかく、パースンズにかえて、かれの学問的な組織はおよそ次のごときものと考えられる。すなわち、社会体系の理論、(一)一般理論(全体社会の理論) (二)特殊理論——経済の理論(A)、政治の理論(G)、社会体系(制度化)の理論(I)、および「文化とパースナリティ」(文化的型相と動機づけ)の理論(L)である。

さて、ガースミルズでは、社会構造は制度＝単位のレベルで考えられていることは前述のとおりであるが、かれらのばあい、制度はその客観的機能によって分類され、同じ

研究ノート

レベルが概念化される。

性格構造と社会構造とを統一的に理解する図式をつくるために、(一)役割＝単位レベルと、(二)制度＝制度的秩序＝単位レベルが概念化される。

客観的機能をもつ諸制度の複合である制度的秩序 (institutional order) として、(一) 政治的秩序——社会構造において権力や權威を獲得、行使し、かつ、その分配を左右する諸制度からなる秩序、(二) 経済的秩序——財、およびサービスの生産、ならびに分配のために労働力、資源、技術などを組織する諸制度からなる秩序、(三) 軍事的秩序——合法的暴力を組織し、その使用を管理する諸制度からなる秩序、(四) 親族的秩序——合法的性交、出産、子供の養育などを規制し、促進する諸制度からなる秩序、(五) 宗教的秩序——普通、規則的に一定の場所において神の集團的礼拝を組織づけ、管理する諸制度からなる秩序、の五つをあげている。なお、これらの制度的秩序に共通な社会的行為の側面として、技術、象徴、地位、教育の四つの領域 (spheres) を指摘している。それゆえ、より正確には、社会構造は制度的秩序 (＝単位) と領域から構成されていることになる。かくて社会構造の単位を考えるばあい、制度＝単位とは別に、制度的秩序＝単位が考えられるが (8)、このように現代社会を念頭におき、

それでは次に、かかる客観的機能によるガースミルズの制度的秩序の分類にあたるのは、パースンズではどれかをみてみると、それにあたるのは、れいのN・J・スメルサーとの共著『経済と社会』(Economy and Society, 1956)における四つの基本的な機能的「問題」による、社会の下位体系の分類であろう。この点から、全体としての社会の構造を考えると、全体社会の構造は、社会とその下位体系、すなわち、経済、政治、統合を受けもつ下位体系、および型相維持と緊張処理を受けもつ下位体系から構成されることになる。ゆえに、ここで、社会の四つの下位体系について簡単にふれておく。

(一) 経済とは、社会の適応の機能を第一次的に受けもつ社会体系である。この経済の目標は、無数の用途をもった手段たる、一般化された用具——たとえば、富(wealth)——を生産することである。(二) 政治とは、目的達成を受けもつ社会体系であり、それは「社会の政治的な機能(もつとも広い意味での)」を焦点としている。「かかる政治の目標は、「社会にとって与えられた体系の目標を達成するのに必要な先要条件(たとえば富——筆者)を、移動させる」能力を最大限にすることであって、その能力は権力(power)と定義される。(三) 統合を受けもつ下位体系は、「よ

り上位の社会体系がはなはだしい内部的葛藤をおこしたり、そのほか内部調整がうまくいかなかったりすることのないよう、文化的な価値型相を個々の行為者の動機づけの構造と関係づけるものである。」(富永訳I、七六頁)この統合の過程は、「連帯」(デュルケム)を維持する過程であり、それは何よりもまず、制度化のメカニズムである。(三) 型相維持と緊張処理を受けもつ下位体系の問題は、「体系の単位にその焦点をあつめるものであつて、体系そのものにないてなされるのではないという点が、統合の問題とちがうところ。統合は単位のあいだの、関係の問題であり、これにたいして型相維持は単位の内部の状態ならびに過程の問題である。」(七八頁)これは、個々の行為者の動機づけ、すなわち文化的型相の内在化のメカニズムである。そして、以上のような経済と、その他の三つの社会の下位体系は相対的な独立性をもち、それらのあいだの関係は境界相互交換の過程(processes of boundary interchange)と記述される。しかしながら、社会とその下位体系との関係については、「全体社会の機能的必要にしかるべく応ずるような、第一次的な貢献である」とか、「分化した下位体系の目標は、より上位の体系が機能していくように〈貢献する〉ものだ」とか、というさければ

ならない機能主義的な目的論におち入っている。したがって、この意味からも、前述したごとく、行為理論を構造—機能的分析の方法論とはなして理解してゆくほうがよいし、別にそうしたからといって、わたくしがいま理解してきたパースンズの図式が、それによって根底からくつがえされる性質のものではない。

もしも、このように、パースンズをながめるならば、かれの業績はじつにすばらしいものである。かれの論文「社会学における一般理論」(“General Theory in Sociology”, in R. K. Merton and others eds, *Sociology Today, Problems and Prospects*, 1959)においては、「私見によれば、大規模で複雑な社会的諸要素の、その相互の関係における体系的な分析ということが、社会学理論のなかでもっとも弱い側面の一つであった。」(60)と述べているし、また、R. K. マーティンのいう「ある限定された領域の社会現象に関する理論」は、過去の社会学の全体的理論を全く観念的なものとして棄てざるのはいが、そのため、そのレファレンスとなる理論をもたないところから、パースンズは中領域の理論の「集成」のフレイム・オブ・レファレンスとなる全体領域の理論、すなわち、社会学における一般理論の必要性を説くのである。マーティン

自身も、パースンズのこの一般理論を、自分の中範域の理論とはちがった現代社会学におけるすぐれた一つのゆき方であるとして認めている(18)。パースンズのこの立場は、以前の社会体系(制度化)の理論という狭義の立場とは異って、社会学理論は、全体社会に関する理論であると考えられてきたことを意味する。パースンズによれば、社会の構造は、その組織のレベルによって次の四つに分けられる。すなわち、(一)第一次的集団のレベル(primary or technical level)。(二)フォーマルな組織のレベル(managerial level)。(三)制度のレベル(institutional level)。(四)および(五)社会のレベル(societal level)である。そして、社会構造におけるかかる四つの組織のレベルは、社会構造のボトム・レベルからトップ・レベルへと体系的な秩序を構成しており、この意味において、四つの組織のレベルのあさだの関係は、単に higher order と lower order system の関係ではなく、質的に異ったインプットとアウトプットの範疇である。このように、全体社会の構造は、四つの組織のレベルにおいて立体的に把握される。

むすび この研究ノートのはじめに述べたように、わたくしの考えは、ドイツ社会学の全体的理論とアメリカ社会学にみられるようなヘミクロソムの綜合へ

という立場が方法論的なくいちがいをもてるところ、これを中間的な領域と考え、この二つの相異なるものを結びつけるその媒体としての制度的な領域を概念化してみることにあった。しかし、はたして、かかる考え方が可能であるかどうか。むしろ、わたくしは、この問題を間接的に、パースンズとガースニルズとを共通のレベルで比較するとうかたちで考え、そして、役割＝単位のレベルのほかに、それとは質的にちがった高次の、いわゆる制度＝制度的秩序＝単位のレベル、あるいは社会体系＝単位のレベルを概念化することを知ったわけである。しかし、これを積極的に概念化することによって、これが二つの異った方法論の媒体となりうるものであるかどうかはさらに吟味しなければならない。さうにしても、ドイツ社会学的全体的理論とアメリカの社会心理学的な社会学との中間に、歴史的に志向された社会制度の心理学が必要なのである。(一九五九・六・一三)

(一) H. Gerth and C. W. Mills, *op. cit.*, p. 23.

(二) R. Linton, *The Background of Personality*, 1945, 邦訳、十七頁。

(三) 社会体系の単位は役割である、とさうばあいの役割とは、広義で解せば、パースンズのいう三つの単位、すなわち、社

会的行為(social act)の地位と役割(status-role)の行為者自身(actor himself)。それら集合体(collectivity as actor)を含み。(T. Parsons, *The Social System*, 1951, pp. 24 ff.)

(4) M. J. Levy, Jr., *The Structure of Society*, 1952, pp. 18 ff.

(5) T. Parsons, "Psychology and Sociology," in H. Becker and others (eds.), *For a Science of Social Man*, 1954, p. 70.

(6) 新明正道「社会体系の概念について」社会学の諸問題、高田先生古希祝賀論文集、有斐閣、一九五四、四四二頁。

(7) T. Parsons, "The Small Group and the Larger Social System," in Roy R. Grinker (ed.), *op. cit.*, 1956, p. 191.

(8) H. Gerth and C. W. Mills, *op. cit.*, pp. 349 ff.

(9) T. Parsons, "General Theory in Sociology," in R. K. Merton and others (eds.), *Sociology Today*, 1959, p. 7.

(10) R. K. Merton, "The Role-Set: Problems in Sociological Theory" *The British Journal of Sociology*, Vol. VIII, No. 2, June, 1957, pp. 106-120.

—— 筆者 関西学院大学大学院学生 ——

Action Theory and the Concept of Social Structure

Hiroshi Uga

Kwansei Gakuin University

No matter how we approach the society, We fit into one or the other of two basic approaches: German and American types. These two approaches are mutually exclusive and we can understand them as competing, but in the end we can in fact we must use both approaches. As Karl Mannheim has written, there were hardly ever two different styles of study as fit to supplement each other's shortcoming as are the German and American types of sociology. In such a context, it is one of the special obligations of the sociologist to build a working model in terms of which we can use both.

The persistent theme of American sociology, which can be succinctly described as "voluntaristic nominalism", is the adherence to a psychological conception of society from subjective point of reference. There is no discussion of the society as a whole in an historical epoch. As Talcott Parsons has said in *The Social System* (1951), "Obviously most empirical sociological studies are concerned with partial social systems rather than with societies as wholes". The society as a whole, which is called a "society", is a aggregate of social systems. A society, then, is not only "a" social system, which of course it is, but is also a very complex network of interlocking and interdependent subsystems, each of which is equally authentically a social system. The concept of society is distinguished from that of social system. In the context of the microscopic-macroscopic range of the society, We want to make two main points. One is, we think, that the social system is organized on the level of "role-unit". Two, that the society as a total system is organized on the level of "social system-unit".

Hans Gerth and C. Wright Mills, in their *Character and Social Structure* (1954), wrote that:

Just as role is the unit with which we build our conception of institutions, so institution is the unit with which we build the conception of social structure.

We must consider not only the psychology of social system but also, and primarily, the historical logic of the society as a total system. Our analysis always involve the articulation of two microscopic-macroscopic levels: the role-unit and the social system-unit.